

平安朝和歌と「もの」形容詞「もの」形容動詞

東 辻 保 和

はじめに

「もの」形容詞は、奈良時代において既に成立していたと考えられるが、文献に盛んに見え出すのは、周知の如く平安時代に至ってからである。

豊田知加子氏は、平安朝の物語日記隨筆等について、どれくらい「もの」形容詞、「もの」形容動詞が用いられているかを詳細に調べられたのであるが、いま新たに、小稿の筆者の調査した結果によれば、異り語数では、「もの」形容詞が六三語、「もの」形容動詞が五九語、計一二二語となり、延べ語数では、「もの」形容詞が八三一語、「もの」形容動詞が三三四語、計一一四五語となる。

いま、延べ語数の大きいものから順次挙げてみると、次の如くである。

〔「もの」形容詞〕

物さわがし(九八)、物くるは(ほ)し(九四)、物し(七九)、物うし(七七)、物ものし(六二)、物はかなし(五六)、物ころぼそし(五一)、物おそろし(四七)、物ふかし(二九)、物むつかし(二九)、物かなし(二六)、物おもはし(二三)、

物げなし(一七)、物なげかし(二六)、物とほし(一五)、物きよし(一二)、物すさまじ(一〇)、物はづかし(一〇)、物つつまし(六)、物さびし(五)、物わびし(五)、物うらめし(四)、物きたなし(四)、物たのもし(四)、物はかばかし(四)、物あし(三)、物ちかし(三)、物はしたなし(三)、物ゆかし(三)、物うるはし(二)、物おもしろし(二)、物ところづきなし(二)、物わかし(二)、物わづらはし(二)、物いひさがなし(一、以下同じ)、物いそがし、物うしろめたし、物うとし、物うひうひし、物おいおいし、物きらきらし、物くさし、物くねくねし、物くらし、物くるし、物けぢかし、物ころうし、物ころぐるし、物このまし、物ごはし、物さうざうし、物しどけなし、物たかし、物なさげなし、物はえなし、物はやし、物はらだたし、物へだてがまし、物めかし、物ゆゆし、物よし、物をかし、物をこがまし

〔「もの」形容動詞〕

物あはれなり(九六)、物きよげなり(二三)、物ころぼそげなり(一九)、物しげなり(一九)、物まめやかなり(一六)、物うげなり(一五)、物はかなげなり(一〇)、物おもはしげなり(九)、物なげかしげなり(八)、物はなやかなり(八)、物ふ

かげなり(五)、物むつかしげなり(五)、物あざやかなり(四)
 物おそろしげなり(四)、物おもひなげなり(四)、物さわがし
 げなり(四)、物しづかなり(四)、物かましげなり(三)、物
 げさやかなり(三)、物さびしげなり(三)、物しめやかなり
 (三)、物つつましげなり(三)、物あはれげなり(二)、物き
 よらかなり(二)、物こまやかなり(二)、物さわやかなり(二)
 物したたかなり(二)、物すさましげなり(二)、物のどやかな
 り(二)、物ほづかしげなり(二)、物ほこりかなり(二)、物
 ものしげなり(二)、物あらはなり(一、以下同じ)、物いとほ
 しげなり、物いりげなり、物うらみがちなり、物うらめしげなり、
 物うらかなり、物おもひがほなり、物かしこげなり、物きよう
 なり、物きららかなり、物くるほしげなり、物ころほそげなり、
 物こほしげなり、物こまかなり、物しのびやかなり、物すが
 やかなり、物そぼそしげなり、物たのもしげなり、物つよげな
 り、物ほるかなり、物ふびんなり、物ほこりらかなり、物ほめが
 ちなり、物やはらかなり、物ゆかしげなり、物わかやかなり、物
 わづらはしげなり

ところで、和歌における「もの」形容詞、「もの」形容動詞の使
 用状況については、根来司氏が「『もの』形容詞、「もの」形容動
 詞で忘れたいのは『ものうし』を除いては散文にもつばら用いら
 れて和歌にはほとんど出ないことである。」として、三代集の例を
 挙げられ、又、糸井通浩氏も同様の趣旨で万葉集、八代集の例数を
 挙げられたか、未だ十分には明らかでない。そこで、小稿ではその
 点を明らかにしたい。調査範囲は次下に止まる。いずれも一回の調
 査である。

佐伯梅友校注『古今和歌集』(日本古典文学大系) 西下猛一
 『古今集総索引』大阪女子大学『後撰和歌集総索引』片桐洋一
 『拾遺和歌集の研究』栗田道 糸井通浩 『後拾遺和歌集総索引』増田
 繁夫他『金葉和歌集総索引本文索引』滝沢貞夫『詞花集総索
 引』松野一 久保田淳 『千載和歌集』滝沢貞夫『千載集総索引』
山松隆一 後藤重郎校注『新古今和歌集』(日本古典文学
 大系) 滝沢貞夫『新古今集総索引』『圖書寮叢刊
 古今和歌六帖上下』糸井通浩 『私家集小町業』友田 総索引
 曾田文雄『伊勢集斎宮集語彙索引』片桐洋一『紀貫之
 全歌集総索引』三保サト子『道命阿闍梨集本文と総索引』神
 作光一『曾禰好忠集の校本・総索引』久保木哲夫『四条宮下野
 集本文及び総索引』高沢貞夫 『校本堀河院御時百首和歌とその
 研究』本文篇、古注編 今井源衛監修『校本馬内侍集と総索引』
 井狩正司『建礼門院右京大夫集』校本及び 赤羽淑『藤原定家全
 歌集全句索引』伊藤嘉夫校注『山家集』(日本古典全書) 臼
 田昭吾『西行法師全歌集総索引』小沢サト子『東洋文庫蔵明恵
 上人歌集本文と総索引』山口明 『鎌倉右大臣家集本文及び総索引』
 森本元子『俊成卿女全歌索引』清水文雄『校本定本和泉
 式部歌集(正・続)』同『和泉式部歌集』(岩波文庫) 平林文
 雄『成尋阿闍梨母集の基礎的研究』川村晃生『能因法師集・玄
 々集とその研究』熊本守雄『惠慶集校本と研究』半田公平
 『寂蓮法師全歌集とその研究』久保田淳『藤原家隆集とその研
 究』片山亨『校本秋篠月清集とその研究』多賀宗隼『校本拾
 玉集』及び、上を除く和歌史研究会編『私家集大成中古Ⅰ、Ⅱ、
 中世Ⅰ』所収の私家集すべて、同『中世Ⅰ』のうちの「後鳥羽院

御集」である。

第一節

まず、平安朝和歌を一共時態として見た場合、そこに何種類の「もの」形容詞、「もの」形容動詞が使用されているものであろうか。それを列記してみれば次の如くである。

物うし、あらまものうし、物恨めし、物おそろし、物思はし、物かなし、物くるほし、物こひし、物さびし、物ところせし、物なげかし、物なつかし、物はかなし、物むつかし、物めかし、物めづらし、物々し、物わびし、物あはれなり、物あらげなり、物うげなり、物わびしらなり

これら二二異り語を、前記の物語等作品群に所用の「もの」形容詞、「もの」形容動詞と比較してみるのに、「あらまものうし」「物こひし」「物ところせし」「物なつかし」「物めづらし」「物あらげなり」「物わびしらなり」等の七種は、物語等作品群に見られない語詞であるが、全体的には、物語等作品群の二二異り語に對して、大きな隔りの存することが判る。

そこで、和歌所用の二二異り語について、少し詳しく調べることにしたい。まず、延べ語数の多いものから順次掲げることとし、歌集名及び歌番号を示す。

「もの」形容詞」

物うし(歌集四三、延べ語数七八)

紀貫之全歌集(八五四a、八六四b、九六七)、みつね(二四〇)、元良親王集(三四)、きよたゝ(七五)、もとさね(二六七)、藤原義孝集(七一)、斎宮女御集(五、八〇)、よしのふ

(一九〇)、惠慶集(二七八)、兼盛集(二六三)、しげゆき(一〇六、二五三)、曾爾好忠集(六六、二九二)、増基法師集(七〇)、兼澄集(四〇、八一)、大式高遠集(一三三)、道濟集

(六三)、大納言公任集(二二七、一三二、四三九)、和泉式部歌集(四六九、四七〇、二四九、一五二五、一五三三)、主殿集(七六)、散木奇歌集(九七六)、為忠集(六五)、田多民治集(二一四)、前參議教長卿集(二〇二)、出觀集(三四七)、

風情集(二四一)、源三位頼政集(四〇五)、林葉和歌集(五一、三四二、七四七)、山家集(七八二、一〇六六)、林下集(一八七、二七九)、粟田口別当入道集(五八)、寂蓮入少輔入道か百首、左大臣家十題百首(八八、三〇三)、股宮門院大輔集(五二、八五)、太皇太后宮小侍從集(四、九六)、明日香井集(三〇〇、七四五、八五〇)、光祿集(四一、四三八)、拾玉集(三〇九、八六七、八八九、三六一七、四二六三、四三〇三、四七一

八)、露色随詠集(五四六)、土御門院御集(二六〇)、建礼門院右京大夫集(五三)、玉吟集(一三〇九、一八〇二、二三四七、三〇八四、三一三三)、後鳥羽院御集(六二八、七一九)、古今集(一五)、後撰集(二六一、一三二六)、後拾遺集(九二)

但し、他の私家集への混入、あるいは私家集と勅撰集との重出等による重複歌は、それぞれの作者の家集のものを残し、他は除いてある。以下同様である。

物さびし(歌集八、延べ語数九)

藤原長能集(六九)、曾爾好忠集(二八一)、刑部卿平忠盛朝臣集(一八)、出觀集(六一六、八一七)、風情集(三六八)、林下集(一五二)、長秋詠藻(一五七)、寂蓮入歌仙落書(二

八)

物かなし(歌集三、延べ語数四)

古今和歌六帖(第六の九三二)、山家集(三三三、四七五)、太

皇太后宮小侍從集(七四)

物おそろし(歌集三、延べ語数三)

曾禰好忠集(一一九)、相模集(四八四)、山家集(二二九)

物わびし(歌集三、延べ語数三)

和泉式部歌集(二〇二九)、殷富門院大輔集(八四)、拾玉集

(三三一九)

物恨めし(歌集二、延べ語数二)

肥後集(一二三)、後鳥羽院御集(四二三)

物なげかし(歌集二、延べ語数二)

紀貫之全歌集(五九二)、相模集(五七九)

物むつかし(歌集二、延べ語数二)

大納言經信卿集(九三)、散木奇歌集(三四七)

物思はし(歌集一、語数一以下同じ。)

紀貫之全歌集(五九二西本願寺本)

物くるはし 明恵上人歌集(七七)

物ところせし 拾玉集(六〇六六)

物なつかし 大江嘉言集(一八四)

物はかなし 古今和歌六帖(第四の八二)

物めかし 山家集(二〇四六)

物めづらし 殷富門院大輔集(二二九)

物々し 山家集(二二九二)

あらま物うし 明恵上人歌集(二二)

【「もの」形容動詞】

物あはれなり(歌集一〇、延べ語数二三)

御堂関白集(二三)、堀河院御時百首歌(七一六)、有房中將集

有房集(一六一)、刑部卿頼輔集(三八)、長秋詠藻(二〇五)、

寂連集(一一八)、拾玉集(二八〇、九三三、二三九六)、後鳥

羽院御集(八、五五)、定家全歌集(二八二六)、中御門大納言

殿集(三五)

物うげなり(歌集四、延べ語数四)

重之女集(六)、康資王母家集(五〇)、六条修理大夫集(一八

九)、山家集(一一九〇)

物あらげなり(歌集一、語数一、次同じ。)

山家集(一一七四)

物わびしらなり 古今集(四五二)

右に見る如く、「もの」形容詞が延べ一三語であるのに対し

て、「もの」形容動詞は僅かに一九語にすぎない。

次に、各語詞毎に、その使用率を調べてみることにする。

表の凡例

(一) A欄は、各語詞の延べ語数を示す。
 (二) B欄は、「もの」形容詞語彙、「もの」形容動詞語彙各小計に占めるA欄各語詞の比率を示す。
 (三) C欄は、A欄の合計(一三二)に占めるA欄各語詞の比率を示す。

	A	B (%)	C (%)
物 う し	78	69.0	59.1
物 さ び し	9	8.0	6.8
物 か な し	4	3.5	3.0
物 お そ ろ し	3	2.7	2.3
物 わ び し	3	2.7	2.3
物 恨 め し	2	1.8	1.5
物 な げ か し	2	1.8	1.5
物 む つ か し	2	1.8	1.5
物 思 は し	1	0.9	0.8
物 く る は し	1	0.9	0.8
物 こ ひ し	1	0.9	0.8
物 と こ ろ せ し	1	0.9	0.8
物 な つ か し	1	0.9	0.8
物 は か な し	1	0.9	0.8
物 め か し	1	0.9	0.8
物 め づ ら し	1	0.9	0.8
物 も の し	1	0.9	0.8
あ ら ま 物 う し	1	0.9	0.8
小 計	113	100.3	
物 あ は れ な り	13	68.4	9.9
物 う げ な り	4	21.1	3.0
物 あ ら げ な り	1	5.3	0.8
物 わ び し ら な り	1	5.3	0.8
小 計	19	100.1	
合 計	132		100.5

この表によって明らかかなように、B欄においては、「物うし」と「物あはれなり」とが、「もの」形容詞、「もの」形容動詞それぞれの範疇において最高の使用率を示しているのであるが、C欄により全体的に見れば、「物うし」の比率が他を圧して高いことが判るのである。そのみならず、C欄第四位の「物うげなり」は、語構成上、「物うし」とは派生語の関係にあるので、これをも併せれば、「物うし」の占める比率は一段と高くなる。

以上述べた特徴は、和歌集に見られたところであるが、所謂物語和歌にまで調査対象を拡大した場合においても、殆ど異同が認められない。即ち、「物うし」が竹取物語一例（『物語和歌総覧』一一二）、宇津保物語二例（同一六八、一八二）、榮花物語一例（『国歌大観』六〇二）、「物恨めし」が源氏物語一例（『物語和歌総覧』六〇七）と見出されるにすぎない。

第二節

それでは、歌集別に見た場合はどうであろうか。

異り語の最も多いのは山家集であり、次の七種が認められる。

おもひいづるすぎにしかたをはずかしみあるに物うきこの世なり
けり（七八二）

山ふかみけぢかきとりのおとはせで物おそろしきふくるふのこゑ
（一一九一）

なにとなくものかなしくぞ見えわたるとばたのおもの秋の夕ぐれ
（三三三）

あはれにぞものめかしくはきこえけるかれたるならのしばのおち
ばは（一〇四六）

やまふかみこぐらきみねのこずゑよりもものしくもわたる風か
（一一九二）

身にもしみ物あらげなるけしきさへあはれをせむる風のおとかな
（一一七四）

やましろのみづのみくさにつながれて駒ものうげにみゆる旅かな
（一一九〇）

これに次いで多いのは、殷富門院大輔集及び拾玉集で、それぞれ四種の異り語が認められる。

殷富門院大輔集（書陵部蔵）

まきのやに秋やきぬらんやまかけのそとものすゝみけさはものう
き（五二）

たひころもつらこきいづるつりふねにものこひしくやきみもなか
むる（二〇八）

しらすりきふりにしならのさとにきてものめつらしきまとるせん
とは（二一九）

神な月いかなるときあめなれはかきくもるよりもわひしかる
（八四）

拾玉集

かねてよりみるも物うきわらひ哉おられしとてや手をにきるらん
（三〇九）

いはりさす野沢の夏のゆふすすみの所せき秋にそありける（六
〇六六）

あきのいほに物わひしくてすむ人のおなしねになく虫のこゑ哉
（三三一九）

なにとなく物あはれなる山里の庭のあさちの今朝のはつ雪（九三

三)

次いで多いのは、紀貫之全歌集、曾爾好忠集、後鳥羽院御集の三集で、それぞれ三異り語が認められる。

紀貫之全歌集

なきとむる花しなれば鶯もはては物うくなりぬべら也(九六七)

秋はわが心のつまにあらねどもものおもはしき比にもあるかな(五九二西本願寺本)

(五九二西本願寺本)

秋はわが心のつまにあらねども物なげかしき比にもあるかな(五九二)

曾爾好忠集

みちとをみものうしとおもふ小春のゝもはなみるときそこゝろゆきぬる(六六)

ひくるればしたはこくらきこのものおそろしきなつのゆふくれ(一一九)

けふりたえものさひしかるいほりには人こそ見えね冬はきにけり(二八一)

(二八一)

後鳥羽院御集

ものことにあらたまりゆく春雨にいとゝふりゆく我そ物うき(六二八)

かへる雁かすみの宇治に声はして物うらめしの春のけしきや(四一三)

一三)

なにとなく物あはれなる二月の雨そほふれるゆふくれの空(八)

次に、相模集、和泉式部歌集、散木奇歌集、出観集、風情集、林下集、長秋詠藻、太皇太后宮小侍従集、明恵上人歌集、古今集、

古今和歌六帖の一一集には、それぞれ二異り語が認められる。相模集

はてはみなやらいてすすくとし月のおそろしや身にとまるらむ(四八四)

かつきするあまのたくなはうちへてものなげかしくおもほゆるかな(五七九)

和泉式部歌集

はななみのさとときけば物うきに君ひきわたせあまのはしだて(四六九)

日のやくとなげくなかにもいとせめて物侘しきは夕まぐれかな(二〇二九)

散木奇歌集

たかためのなをさりことにあみたふと物うかるねになへしもする(九七六)

蚊遣火の煙になるゝこもすたれ物むつかしきわか心かな(三四八)

出観集

おいぬれば物うき物をこよひこそむかし月みしこゝちのみすれ(三四七)

しほれあしのしたはとちませこほりして物さひしかるなにはえのさと(六一六)

風情集

かはり行我よのおいもほとゝきすまつにものうきことのなきかな(二四一)

くる人もなきやまざとはうぐひすものさびしかるねにぞなくな

る(三六八)

林下集

としのゆくすゑはものうしいさゝらは我もをなしきわかのうちち
へ(一八七)

うちしくれものさひしかるあしのやのこやのねさめに宮こゝひし
も(一一一)

長秋詠藻

ふゆされは野はらもいとゝしもかれてものさひしくもなりまさる
哉(一五七)

なにとなくものあはれにもみゆる哉かすみやたひの心なるらん
(二〇五)

太皇太后宮小侍従集

かそふれはものうかるへきけふをしもとしくれぬとてなにいそく
らむ(九六)

さらぬたにものかなしかる山里に秋くれはつるいりあひのかね
(七四)

明恵上人歌集

ハヤシニハアラムノウキカキノキカワレモウキヨハイトハシキ
ソヨ(一一)

ツネナラヌヨヲスツルトモキミソシルモノクルハシト人ハイファミ
ヲ(七七)

古今和歌集

春たてど花もにはほはぬ山ざとは物うかるねにうぐひすぞなく(一
五)

心のちとてつゆをたのむにかたければ物わびしになくのべのむ

し(四五二)

古今和歌六帖

はるまけて物かなしきにさよふけてとかわなくしきたかためかな
く(第六の九三二)

わすれねとなにそもしろし夢のうちにものはかなくてやみにしも
のを(第四の八二)

右に挙げた以外の四五の歌集には、「もの」形容詞あるいは「もの」形容動詞が一種ずつしか見出されない。ここに一々引用することは紙幅の都合上省略する。

「もの」形容詞、「もの」形容動詞の使用が、時代の歌風や個人の作風などと関係を有するものかどうかについては、筆者のよく論じ得るところでないが、特に目立ったいくつかの事象について、左に記しておこう。

(一) 「物うし」「物あはれなり」の兩者共に最多用例を持つものは、慈円の拾玉集である。(「物うし」七例、「物あはれなり」三例)

(二) 一つの歌集に「物うし」の二例以上認められるものは、和泉式部歌集をはじめ一八集であるが、その中で、家隆の「玉吟集」には五例を数え、且、「物うし」以外は使用されていない点で特殊である。和泉式部歌集が同じく五例であるが、これには、他に「物わびし」一例が見出される。この二歌集は、「物うし」の特立している点で共通する。これに次ぎ、「物うし」三例のみの認められるものは、大納言公任集、林葉和歌集、明日香井集である。

(三) 定家全歌集には、「もの」形容詞の確例が見当たらない。但し、

体言「物はかなさ」「物かなしさ」は用いられている。

(四) 山家集に認められる七種の「もの」形容詞、「もの」形容動詞の内、「ものめかし」「ものものし」「ものあらげなり」は、他の歌集には見出されない語詞である。

(四) 明恵上人歌集に認められる「ものくるはし」「あらまものうし」は、共に和歌用語としては特異なものであるう。

第三節

「もの」形容詞、「もの」形容動詞は、既に述べた如く、その異り語数においても、又延べ語数においても、和歌に比べて物語等作品群の方が際立って多彩である。それでは、斯様な数量的関係は、詞書と和歌との間にも認められるのであろうか。

まず、詞書に用いられているが和歌には用いられていない語詞（これを詞書特有語詞と仮称する。）を挙げると、次の一〇種がある。

物疑はし、物心うし、物心細し、物さわがし、物をかし、物思はしげなり、物心細げなり、物なげかしげなり、物はかなげなり、物むつかしげなり

次にその用例を引く。

或男、外にとまりて、「物疑はしくな思ひそ」といひたるに（和泉式部統集一二一六）

ものころうくおぼゆるころ、物に詣でて、しばしありてかへる日（同右九二四）

御返に、つれくともの心ほそくおほえ給て、かきあつめ給へりけることを（斎宮女御集五二a、他に為信集一五七、赤染衛門集入榊原家本V三六〇、散木奇歌集三七五、五五〇、一二九一、山

家集八四六、千載集一〇九二）

このせうと、いてはしりて、ちくぬしもきくたまふに、いと物さはかしく、このわらはくいつくからきたるそ、いつれのすき物の使そといひければ（小野篁集一三、他に赤染衛門集入書陵部蔵V四八、四条中納言集一四七、一五二）

少納言といふ人、いとくちとくものをかしくわかよむ（しげゆき一八八）

あにの少将は、ものをもしけにてしやうのふえをふき給をみれば（藤原義孝集七七、他に建礼門院右京大夫集一八六、二〇七）しも月はかりより、れいならずなやましうし給しに、いみしう物心ほそけにおほしたりしを（四条中納言集一七二）

かゝる事きこえて、すけなうもてなされてものなげかしけにてをんな（赤染衛門集入榊原家本V一四〇、他に和泉式部統集一三二二）

ふねにてみれば、つりふねのものはかなげにておちてみれば（肥後集一五七）

うちとけたる人なとかものむつかしけにはなといひ侍ければ（後拾遺集六九五）

右とは逆に、和歌に用いられて、詞書に用いられていないもの（これを和歌特有語詞と仮称する。）は、次の一〇種である。

物うらめし、物こひし、物とこるせし、物なつかし、物めかし、物めづらし、あらま物うし、物あらげなり、物うげなり、物わびしらなり

この内、「物なつかし」以外は、前節に例歌を引いたので、ここでは省く。

ふきくるに物なつかしきかそすなるかさうゑのむめははなさきぬらし（大江嘉言集一八四）

又、和歌、詞書に共通して用いられているもの（これを共通語詞と仮称する。）は、次の一二種である。

物うし、物おそろし、物思はし、物かなし、物くるはし、物さびし、物なげかし、物はかなし、物むつかし、物ものし、物わびし、物あはれなり

和歌については、前節に例歌を引いたので、ここでは詞書の用例のみを掲げる。

夜やうくあけゆき、日さしいつるまで、あしたのともこのうくおもほえて（加茂保憲女集五九三頁下、他に赤染衛門集八禰原家本V二三八、和泉式部統集一三五三、四条中納言集二六五、肥後集一五四、建礼門院右京大夫集八八、二六三、後撰集一三二六）おなしころ、いたうあれたるやまさとのいゑにて、ものおそろしうなど人の申に（殷富門院大輔集一八三）

弥生の比、よもすがら物がたりしてかへり侍りし人の、今朝はいとど物おもはしきよし、申しつかはしたりしに（辰翰本和泉式部歌集一六三四、他に建礼門院右京大夫集六一）

正月とふらひにまかれりければ、雪いとたかう、つれく物かなしかりければ、かへりてをくりける（在中将集六〇、他に同集八一、伊勢集七、藤原隆信朝臣集三九八、隆房集五〇、光経集七七、建礼門院右京大夫集一五七、一六一、二四九、二六二、新古今集七九三八西行上人集四五四に類似文あり。V）

わかき人く、ものくるをしようこくらくにまつへきよしをかきつけたるをみて（大斎院御集九〇）

九月のつこもりかたに、ものへまかりしゆふへに、しかのわたりをまかりしかは、風ふきてものさひしかりしかは（粟田口別当入道集一七一、他に同集二三九、惠慶集一六七、寂蓮集二二五、浄照房三六）

つかさめしに思ふことならて、ものなげかしうおもふに（赤染衛門集入書陵部藏V二六）

しほゆのことに、つのにわたりに、かりやのものはかなきにるて（肥後集一七二）

なんとなくものむつかしければ思むつかりたるに（相模集六三、他に和泉式部歌集一六〇）

カナル歌人タチノナカニ、モノシクナニトナキコトラマウシイタサムコトハユケハ（明恵上人歌集一〇）

みなともの人、ものわひしくて、京におもふ人なきにしもあらず（業平集二五）

なかつきのつこもりかたに、かゝみの山こえて、ものあはれにて（素性集二五、他に「もとさね」一六〇、相模集一、赤染衛門集入書陵部藏V四〇九、和泉式部歌集八九、一三七九、一四七八、四条中納言集一六八、成尋阿闍梨母集四下五、九下九、出羽弁集一〇、肥後集九〇、一〇六、前参議教長卿集八二五、

皇太后宮亮経正朝臣集九七、刑部卿頼輔集三八、一〇五、山家集八七二、粟田口別当入道集一五四、藤原親盛集一一一、閑谷集一九九、明恵上人歌集三四、建礼門院右京大夫集八八、二六三、千載集一一三九）

右に見て来た如く、数量的には、詞書特有語詞と和歌特有語詞とが共に一〇種、共通語詞が一二種となつて、三者の間に殆ど差が

認められない。したがって、この点において、和歌と詞書との間には、物語等作品群と和歌との間に認められた関係とは異なるものが存在すると言わなければならない。

同じ散文とは言いながら、物語等の如く独自の世界を創造するのと異り、詞書の場合は、主たる和歌に対してあくまでも従の立場に置かれており、文の長さも一般には極めて短い。題詠ともなれば、一体言である。

そもそも、和歌に詠まれる世界を全く離れた詞書独自の世界というごときものは、有り得ないのであろう。それ故に、詞書の用語においても、和歌表現と無関係に多種多様の詞書特有語詞が用いられる可能性は、乏しかったのかも知れない。

詞書特有語詞、和歌特有語詞及び共通語詞については、なお考えるべき問題が存する。

例えば、「かなし」という形容詞に対して、「かなしげなり」という派生形容動詞が存在するように、「もの」形容詞に対して、派生「もの」形容動詞が存在する。この形容詞と派生形容動詞との関係が、共通語詞と詞書特有語詞との間に認められる。

次に掲げる上段は、「もの」形容詞で共通語詞、下段は、派生「もの」形容動詞で詞書特有語詞である。

物思はし — 物思はしげなり

物なげかし — 物なげかしげなり

物はかなし — 物はかなげなり

物むつかし — 物むつかしげなり

ただし、この結果を以て、直ちに派生「もの」形容動詞を詞書特有語詞と断ずることは正しくない。何故ならば、共通語詞には

「—げ」形容動詞は見当たらないが、一方、和歌特有語詞には、「物あらげなり」「物うげなり」が存するからである。そこで、因みに、八代集に用いられている、形容詞からの派生形容動詞「—げなり」を調べたところによると、歌集によって多少の差は存するものの、全体的には、和歌と詞書との間に数量的差が殆ど無いと言える。してみると、派生「もの」形容動詞が和歌には二種しか現れない、しかも、その内の「物あらげなり」は、山家集にただ一例のみ認められること、又、いま一つの「物うげなり」は、重之女集、康資王母家集、六条修理大夫集、山家集にそれぞれ一例ずつ、分散して見出されることは、「もの」形容詞、「もの」形容動詞が和歌表現に使用されること少なく、その中において、「物うし」の使用率のみが格段に高いことと照し合せてみる時、意味の無い現象とは言い難いと思われる。

かくて、派生「もの」形容動詞は、和歌よりも詞書に使用される傾向が強かったと判断されよう。

第四節

本節では、平安朝和歌における「もの」形容詞、「もの」形容動詞を通時的に考察したい。それに先立つ奈良時代では、万葉集に既に「物悲」（四一四二）、「物恋之」（六七）、「物恋敷」（二七〇）、「物悲良」（七二三）が現れている。

平安時代に入り、古今集前期の所謂六歌仙時代の和歌には、「もの」形容詞、「もの」形容動詞の確例は見当たらない。ただ、「小町集」の一〇番歌、古今集九四四番歌

山里は物のわびしき事こそあれ世のうきよりもすみよかりけり

の「物のわびしき」が、毘沙門堂本古今集注においては、「モノサヒシカル」となっていることを記しておく。

物語和歌に目を注げば、竹取物語に

帰るさのみゆき物うく思ほえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ

が有るが、現存本竹取物語の成立年代については、弘仁年間（八一〇—八二三）説から、天曆（九四七—九五六）頃説まで諸説が有り、したがって、これまた確例とは成しがたい。

とすると、寛平五年（八九三）の皇太后班子女王歌合（寛平御時后宮歌合）における在原棟梁の

春なれど花も匂はぬ山里はもの憂かる音に驚ぞなく

や、紀貫之全歌集に見える「物うし」三例、「物思はし」「物なげかし」各一例（但し、「物思はし」は五九二番歌の異文）などが最も早い例となろうか。しかも、これらの内四例までが「物うし」であることは、平安朝和歌を通じて、「もの」形容詞の内で「物うし」が最も多く用いられてゆく兆を、早くもここに見せていると言えよう。

貫之とはぼ同時代の歌人の家集である「みつね」、元良親王集、

「もとさね」、「きよたゝ」、藤原義孝集、斎宮女御集、能宣集、

東慶集、兼盛集等に僅かに見られる「もの」形容詞も、すべて「物うし」ばかりである。又、成立年代や転写過程に問題の有る宇津保物語ではあるが、前田家本によれば、和歌所用の「もの」形容詞は、次に引く如く二例とも「物うし」である。

さは姫や物うかるらん春のゝに花のかさぬふえだのみえねば（一

三四）

春ふかみみぎはのせりもおひぬらしいまはものうしわかたつむ人

（一四八）

和歌に、「物うし」以外の「もの」形容詞の見えるのは、曾禰好忠集（好忠、延長末年八九三〇頃—長保五年八一〇〇三頃）、藤原長能集（長能、寛弘六年八一〇〇九頃没）、大江嘉言集（嘉言、正暦三年八九二〇文章生、没年未詳）の頃からであり、好忠集に「物おそろし」「物さびし」、長能集に「物さびし」、嘉言集に「物なつかし」が見られる。（各所在は第一節に掲げてある。以下同じ。）

一方、「もの」形容動詞としては、重之女集（父重之は長保年間八九九—一〇〇三没）に「ものうげなり」の見えるのが早い。

鶯のまたものうげになくなるはけさも木すゑに雪やふるらん（八）
 歌語として「ものあはれなり」の用いられたのは、管見では、御堂関白集（道長、康保三年八九六—万寿四年八一〇二七）が最も早いものと思われる。

華山院より御ふみあり

たきのををいかにきくらむ都すらものあわれなるころにあらすや（二二）

詞書ならば、既に早く素性集や「もとさね」にその用例を見る。

道長とはぼ同じ頃の和泉式部（天元元年八九七八—没年未詳）の歌に「物わびし」が初めて見える。「物恨めし」が源氏物語に見えるのも、ほぼ同じ頃のことである。

つれなくて過ぐる月日を数へつつ物うらめしき暮の春かな（竹河巻、物語和歌総覧六〇七）

その後、大納言経信卿集（源経信、長和五年八一〇二六—承徳元年八一〇九七）に、「物むつかし」が初めて見える。

芦垣の隙なくかゝる雲の井の物むつかしくしけるわか恋（九三）

これ以後暫くは、「もの」形容詞、「もの」形容動詞の新見を得ないのであるが、山家集（西行、元永元年八一—一八〇〇）建久元年八一—一九〇〇）に、「物かなし」（二例）、「物めかし」「物ものし」「物あらげなり」（各二例）の新見を得るのである。平安末年に到って、一歌集に四語詞の新見は、非常に珍しく思われ、他に例を見ないようである。殊に「物かなし」は本節冒頭に述べたごとく、次に記す「物こひし」と共に万葉集に既に現れた語詞であるが、平安朝に入ってから、和歌には見えず、ようやく山家集に到って姿を現わすことに、奇異の感がする。

平安末年においては、他に殷富門院大輔集（大輔、天承元年八一—一三二〇）頃—正治二年八一—二〇〇〇）頃）に、「物こひし」「物めづらし」を新たに見出す。

院政期から鎌倉時代に亘り、和歌史上は中世に入れられる拾玉集（慈円、久寿二年八一—一五五〇）嘉禄元年八一—一二五〇）には、「物ところせし」が、明恵上人歌集（高弁、承安三年八一—一七三〇）貞永元年八一—一二三二）には「物くるはし」と「あらま物うし」とが新出である。

ここで再び「もの」形容動詞を振返ってみたい。「物あはれなり」が御堂関白集に初出と見られることは、上に述べたところである。その後は、詞書にこそ相模集、赤染衛門集、和泉式部歌集、四条中納言集、出羽弁集（以上各一例）、成尋阿闍梨母集（二例）のように見出されるものの、和歌には見えず、堀河院御時百首歌（長治二、三年八一—一〇五、六）頃詠進）にようやく一例、それとほぼ同時期の元永二年八一—一九〇〇）の内大臣忠通歌合に、

月の眉みねにちかづく夕まぐれおぼろけにやはものあはれなる
(三二)

が現れる。次いで約六十年を隔てて、治承二年八一—一七八〇）の或所廿二番歌合に、

蓬生となり行く庭をかき分けて物あはれなる秋はきにけり（八）

が見え、ほぼ同時期の生存年代の重なる歌人の家集たる有房中将集（源有房、寿永元年八一—一八二〇）頃没）、刑部卿頼輔集（藤原頼輔、天永三年八一—一二二〇）文治二年八一—一八六〇）、長秋詠藻（俊成、永久二年八一—一二四〇）元久元年八一—二〇四〇）、寂蓮集（寂蓮、保延五年八一—一二三九）頃—建仁二年八一—二〇二〇）頃）、拾玉集（前出）、後鳥羽院御集（後鳥羽院、治承四年八一—一八〇〇）—延応元年八一—一二三九）頃）、拾遺愚草（定家、応保二年八一—一六二〇）—仁治二年八一—一二四一）頃）等、平安末から鎌倉初期にかけての作品に、「物あはれなり」が纏まって見出されるのである。例歌を引いておく。あかつきのをのへのかねにうちそへてものあはれなるさをしかのこゑ（有房中将集一六一）

さらぬたにもあはれなるあきのよをいかにせよとてむしのなくらむ（刑部卿頼輔集三八）

春の日ののとかにかすむ山里に物あはれなるいかるかのこゑ（寂蓮集一八八）

なにとなくおしまて過る月日にも物あはれなる夏の暮かな（拾遺愚草員外雑歌二八二六）

以上、通時的に眺めた場合に、最も顕著なのは、共時的考察において述べたと同じく、やはり「物うし」の使用である。この語詞は、平安朝を通じて変ることなく和歌用語として使用された。そうして、

其他の「もの」形容詞は、「物うし」に随伴するかの如く、次第にその種類が増して行ったようである。

いま、この事を示す一証をあげるとすれば、「物うし」以外の「もの」形容詞を用いていながら、「物うし」を用いていない歌集は、藤原長能集、大江嘉言集、相模集、大納言信信卿集、肥後集、刑部卿平忠盛朝臣集、長秋詠藻、明恵上人歌集の八集であるのに対して、「物うし」のみの、あるいは「物うし」の他の「もの」形容詞をも用いている歌集は、四三集にも上るのである。(四三集については、第一、二節を参照されたい。)

結びに代えて

平安朝和歌に所用の「もの」形容詞、「もの」形容動詞の使用率については、第一節に記したところがある。それでは、物語等作品群に所用の語詞の場合はいかゞであろうか。使用率の高いものから順次第一〇位までを掲げてみよう。() はパーセントを示す。

- (1)物さわがし(八・六) (2)物あはれなり(八・四) (3)物くるはし(八・二) (4)物し(六・九) (5)物うし(六・七) (6)物はかなし(四・九) (7)物ころぼそし(四・五) (8)物おそろし(四・一)
- (9)物ふかし(二・五)、物むつかし(二・五) (10)物かなし(二・三)

このように、第一位から第一〇位まで比較的なだらかな使用率の曲線を描いているが、和歌の場合においては、第一位「物うし」だけが極端な高率を示し、第二位の「物あはれなり」といえども、遙かに及ばない。

既に述べたごとく、異り語数、延べ語数共に和歌所用の「もの」

形容詞、「もの」形容動詞は、物語等作品群のそれに比べて、極めて小規模である。と言うよりも、むしろ、ある特定の語詞に偏っていると見るべきであろう。

和歌においては、何故にかかる特徴ある分布が見られるのであるうか。おそらくは、「もの」形容詞、「もの」形容動詞が和歌世界とは十分なじみ得ない特質を有しているからであろう。その特質とは、根来司氏や糸井通浩氏の説かれたような⁽¹⁰⁾この種の語彙の意味に、更により深くは和歌の本質に関わるところが多大であろうと思われるが、小稿では、それらの問題には立入ることをせず、ひとまず、客観的事実を述べるに止めようと思う。

(注)

1 「もの」なる形態の形容詞すべてを指して言う。形容動詞の場合も同じ。

2 平安朝文学における語彙について「もの」複合形容詞について(「大谷女子大国文」第四号所収)

3 調査に当たっては、次の諸書に依った。宮島達夫『古典対照語い表』塚原鉄雄・曾田文雄『大和物語語彙索引』宇津保物語研究会『宇津保物語本文索引 索引篇』松尾聰・江口正弘『落窪物語総索引』鎌田広夫『提中納言物語総索引』馬淵和夫・有賀嘉寿子『今昔物語集自立語索引』松村博司『栄花物語全注釈八』池田利夫『浜松中納言物語総索引』阪倉篤義・高村元継・志水富夫『夜の寝覚総索引』塚原鉄雄・秋本守英・神尾暢子『狭衣物語語彙索引』東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『和泉式部日記総索引』今小路覚瑞・三谷幸子『校本讃岐典侍日記』

4 根来司『平安女流文学の文章の研究続編』四七頁。なお「源語的空間と語り手」(『講座日本文学源氏物語下』所収)にも同様の記述がなされている。糸井通浩「基本認識語彙と文体―平安和文系作品を中心に―」(『国語語彙史の研究二』所収)

5 「伝定家卿詠歌」四五―四番歌に「物近く」が有るが、存疑歌なので除外した。

6 △古今▽左注つらげなり△後撰▽歌うれしげなり、詞きたなげなり、つらげなり△拾遺▽歌うらさびしげなり、詞ころほそげなり、をかしげなり△後拾遺▽歌うらさびしげなり、はつかしげなり、詞あるまじげなり、こちよげなり、ねたげなり△金葉▽歌あさましげなり、かたげなり、やすげなり、詞あやしげなり△詞花▽歌おもげなり、詞あるまじげなり△新古今▽歌おそげなり、詞はかなげなり

7 『未刊国文古註釋大系』に拠る。

8 萩谷朴『平安朝歌合大成』に拠る。以後も歌合は同書に拠る。

9 各語詞毎にその用例数を、「もの」形容詞「もの」形容動詞の合計で除した。用例数は、「はじめに」に記した。

10 注4(但し、根来氏は後者の論文)に同じ。

(57・5・6 高知大学教授)

注4追記 根来司「中古和歌の語彙」(『講座日本文語の語彙第三巻古代の語彙』57・5・25所収)にも触れられている。